

【無料配布】短編ミステリ

文学フリマ福岡11のための書き下ろし

毒入り紅茶事件

作・庵字

——まだ死んでいなかったのか。

喉元まで出かかった言葉を呑み込んだ。

「まあ、入れよ」

そう声をかけてきた照幸てるゆきに招じ入れられて、俺は玄関の敷居を跨ぐ。三和土たみきで靴を脱ぎながら俺は、

——もういい加減“当たり前”を引いたと思ったんだがな……。

今度は完全に心中だけで呟いた。

そろそろ“あの紅茶”を飲みきっていてもおかしくはないと踏み、照幸の自宅へ偵察に来ていた俺は、平日にもかかわらず自家用車がカーポートにあるのを見て、ついにやったか！と喜び勇んで玄関の呼び鈴を鳴らしてみたのだが……。

「有給が溜まっていたね。今年中に取得しておかないとなくなっちゃうというから、仕事は同僚たちに任せて、こうして休ませてもらったんだ」

そういうことか。呼び鈴に應對に出てきた照幸は寝間着を着たままだった。寝癖で髪の一部がはねたままの照幸の後ろ姿を見て俺は、

——しぶといやつだ。

もう一度心の中で悪態をつく。叔父のひとり息子であるお前が死ねば、叔父の遺産はすべて俺の元に転がり込んでくるというのに……。

仏間で叔父の妻に線香をあげたあと——あの業突く張りで陰険な叔父にはもったいない女性めいどだった——居間に通された俺は、座卓を挟んで照幸と向かい合った。

「で、どうしたんだ、今日は？」

「いや、たまたま近くまで来たものだから、顔を出しておこうかと思ってね」

「今日は平日なのか？ やっぱライターなんて仕事をしてると曜日感覚をなくしてしまうんだな。まあ、たまたま僕がいたから良かったけど」

——こっちはちっとも良くないんだよ。

心中とは裏腹に、いやあ、まったくだよ、などと俺は愛想笑いを浮かべた。

「そうだ。この前、父さんのお客からもらったお菓子がまだ残ってたんだ。日持ちしないものなんで、せっかくだから食べていってくれ」

座布団から立ち上がった照幸は、いそいそと居間を出て行った。障子戸が閉められると、俺は、ふう、と息をついた。

……客からもらった菓子か。そう、叔父——照幸の父親は仕事上、客からよくモノをもらっている。人気があるからではない、ただのご機嫌取りだ。金以外に興味のない叔父だから、そういった贈答品は——まとまった額に換金可能な代物でもなければ——息子の照幸のもとに流れてくることになる。

一箇月ほど前、照幸の自宅を訪れた俺は、台所のテーブルに積まれたそんな贈答品の中に、紅茶の箱を見つけた。高級ブランドのティーバッグ一ダース入りのものだった。すでに封は切られており、ティーバッグは十一個しかなかったので、照幸はひとつ消費しているということになる。

——この紅茶を、照幸は飲むんだな。

好き嫌いの多い照幸は、父親から流れてきた贈答品の中に好みでない飲食物があった場合は捨ててしまうこともある。が、照幸は紅茶は嗜むらしい。そのティーバッグは個装されてこそいるが、紙製のパッケージでお洒落に包まれたもののため僅かな隙間がある。注射針を差し入れるだけにじゅうぶんな隙間が……。

帰宅した俺は、すぐに毒物の調達に走った。犯罪系の記事を書く際に取材した裏家業の人間の伝手つてを利用した。そうして再び照幸の自宅を訪問した俺は、隙を見てその紅茶のティーバッグのひとつに毒物を注入した。多すぎず少なすぎず、成人男性ひとりの致死量ぴったりの量を。その“毒入りティーバッグ”から抽出したカップ一杯分の紅茶を飲めば……照幸は死ぬ。毒を入れるティーバッグはひとつだけにした。照幸の死を“自殺”に偽装するためには、残っているティーバッグ全部から毒物が検出されては不自然だからだ。紅茶で毒物を煽つての自殺。警察にはそう見立ててもらわなければならぬ。自殺する理由もある。照幸は最近、気を寄せていた女性に完膚なきまでに振られたという。他人の前では平静を装っているが、その傷は深いに違いない。俺が警察に聴取されたときには、さもそれっぽいことを証言してやろう。

俺が次に照幸宅を訪れたのは、ティーバッグに毒物を混入させてから三日後のことだった。まだ照幸は「毒入り紅茶」を引き当ててはいなかったが、ティーバッグの数は九個に減っていた。照幸は三日で二個程度を消費していることになる。ということは、残りの九個を消費し終えるまでには、長くとも9個÷2個×3日＝13日程度かかることになる。その十三日間のどこかで、確実に照幸は「毒入り紅茶」を引き当てて死ぬはずだ。俺は照幸が死んだかどうかを確認するために、暇を見つけては照幸の家を偵察しに来ていた。今日は平日にもかかわらず車があったから——照幸は車で通勤している——ついに！　と思ったのだが……。

今日は毒を注入してから十五日目になる——というのに、こうして照幸が健在でいるということは……。

「お待ちせ」

思案は照幸の声で破られた。照幸はトレイを運んできていた。その上には、高級そうな生菓子と、二つのカップが載せられていて……。

「どうだ、旨そうなお菓子だろう」

照幸はトレイを座卓に置いてそう言ったが、しかし、俺の視線はカラフルな生菓子ではなく、琥珀色の液体を湛えた二つのカップのほうに釘付けになっていた。

照幸は俺の前に、生菓子とカップをひとつずつ並べて置いた。

「こ……これは……？」

俺はカップを指さす。その先端が僅かに震えているのを自覚した。

「紅茶だよ」涼しい顔で照幸は答え、「でも、ただの紅茶じゃないぜ。これもめちゃ旨いんだよ。例によって親父の貰い物だけだな」

「……………」

「これが最後だからお代わりは出せない。味わって飲んでくれ」

「——いま、なん言った」

「これが最後だからお代わりは出せない。味わって飲んでくれ」

一言一句違えず、照幸は繰り返した。

これが……最後？　つまり……照幸はあの紅茶のティーバッグを二個残していて、その最後の二つを使って、この二杯の紅茶を淹れたと？　そして、未だ照幸はこうして健在でいる。ということは……当たり前の話だが、その二つのどちらかが、俺が仕掛けた毒入りティーバッグだったということになるではないか！

「冷めないうちに」

そう言いながら照幸はカップの取っ手に手を伸ばした——

「待て！」

目をきょとんとさせた照幸と視線がぶつかった。まずい……！　どちらが死ぬにしてもまずい！　俺はもとより、こんな状況で照幸に死なれても困る。やつが死んだときに同席していたなんて、何のための毒殺なのか分からない。自分は遠方において完全なアリバイを得られるからこそその毒殺ではないか……！

「——おい！」

善後策を練ろうと意識がおろそかになってしまっていた。その間に照幸はカップを持ち上げて、口へと運んでいく。何かしなければならぬはずが、何も出来ないまま、照幸がカップを傾けて中身を喉に流し込んでいく様子を、俺は呆然と見つめるしかなかった。

照幸がテーブルに置いたカップの中身は空だった。その手で照幸は、すぐさま生菓子にフォークを入れるにかかる。

「おい……」

「なんだ？」

「無事……なのか？」

「なにが？」

首を傾げる照幸。ということは……俺の眼前にある、このカップの中身は……。

「……よ——用事を思い出した！」

あっ、という照幸の声を背中に。俺は脱兎の如く逃げ出した。

「……なんだよ、あいつ」照幸は、対面に置かれたカップを見つめて、「それにしても妙に苦くて、いつもみたいな味じゃなかったな。ひとつのティーバッグから二杯分抽出したから、味が薄まったせいなのかな？」

残った紅茶は、飲まれることなくそのまま流しに捨てられることとなった。

お読みいただきありがとうございます。

「新生ミステリ研究会」というサークルで出店しております。

「F—47、48」ブースにてお待ちしております！



ホームページ